

令和元年6月2日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2018

課題番号：25370430

研究課題名(和文) Origoと視点によるダイクシス理論の研究

研究課題名(英文) Considering the notions of 'Origo' and 'Point of View' with regard to Deixis

研究代表者

瀧田 恵巳 (Takita, Emi)

大阪大学・言語文化研究科(言語文化専攻)・准教授

研究者番号：70263332

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の成果は、まずドイツ語のダイクシスの方向表現her とhinの派生語彙の空間的用法を調査することにより、いわゆる一人称物語と三人称物語との間で出現の仕方に差異を見出し、そこから人称が本質的に二重構造であると考え、この人称の二重構造を言語オルガノン・モデルにより明示した点にある。さらにこのモデルに「視点」と指示場の中心点であるOrigo「原点」を導入することにより、新たなダイクシスのメカニズムを提示した。またそのダイクシスのメカニズムを主観性の視覚構図offstageとon stageに応用し、その問題点を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来のダイクシス理論は、Origoと視点のいずれかを中心として展開されてきたが、本来二つの概念は、指示場の中心と見る起点という全く別の機能を有している。本研究は、この二つの概念を区別し組み合わせることにより、従来のダイクシス理論における人称の問題や、認知言語学における主観性に関わる問題の中心的な部分を解明することができた。

研究成果の概要(英文)：In this study I found that the German space deictic adverbs, deriving from her and hin, appear differently between first-person novels and third person novels. This difference indicated the "double-system person" which is found in the Organonmodel of Language. By adding two notions: the "Point of View" and the "Origo (deictic center)", the Organonmodel provided a clear understanding of the deictic mechanism, and this clarified viewing arrangements of subjectivity "offstage" and "on stage".

研究分野：言語学

キーワード：herとhin Origo 視点 言語オルガノン・モデル 人称

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、本研究は、従来のダイクシス研究の問題として、次の二つの背景に着目した。

(1) ドイツ語の hier「ここ」-da「そこ」-dort「あそこ」及び日本語のコソアのようにダイクシス機能を持つ指示詞は、しばしば三つの語が同一基盤上に対立する項としてとらえられる。特に日本語のコソアの研究はその傾向が強く、金水(2001:160)は従来のコソアの研究について「いわゆる直示(=ダイクシスに相当する語、金水は現場指示と眼前指示とする)のコソアは同じ空間上に対立的に分布をなすようにイメージされてきた」と指摘する。しかし、ドイツ語の da や日本語のソは、それ以外の語、hier-dort 及びコ-アと比較すると、非常に頻繁に、文脈上の内容を指定するいわゆる文脈照応に用いられる。つまり各三項の対立は不均衡であるといえるが、それにも拘わらず同等の系列のものとして扱われている。

(2) 第二の問題はダイクシスと文脈照応の区別に関する問題である。概してダイクシスは現場や想定上の場を指示場とし、文脈照応はテキストを指示場とするという以外、特に確たる区別はなく、また両者に同じダイクシス表現が適用されるという共通点やその原因については、特に分析、解明されていない。

2. 研究の目的

(1) 基本的意味として、現代ドイツ語の her は「話し手もしくは話し手に準じる者へ(以下下線部を便宜上『話者』と呼ぶ)向かう方向」を表し、hin は「話者から離れどこかへ向かう方向」を表す。この二語は空間的方向と話者というダイクシスの特徴を併せ持ち、且つ人が初めて対象を知覚する原体験にも通じる。本研究では her と hin に関連するダイクシス機能を有する語彙、即ち下への方向を表す herab-hinab 及び herunter-hinunter、上への方向を表す herauf-hinauf、超える方向を表す herüber-hinüber、内なる領域から外への方向を表す heraus-hinaus、ある領域内への方向を表す herein-hinein(以下、便宜上下線部の複合語のうち her を構成要素とするものを her-、hin を構成要素とする複合語を hin-と記述する)の空間的用法を調査し、話者の視点と場面の中心点である Origo「原点」との関係をさらに詳細に分析し、より具体的な認識パターンを提示する。

(2) 理論面において、特に興味深いのは、Bühler(1934/1982)が既にインドゲルマン語の位置指示様式の主要な対立として、指差すしぐさに基づく Der-Deixis「それ-指示」と話し手が自らの位置を知らせる Hic-Deixis「ここ-指示」を取り上げている点である。また Bühler は、Der-Deixis を hin に、Hic-Deixis を her に関連付けている。こうした点は本応募者の見解と極めて一致するが、Bühler は最終的に指差すしぐさと Der-Deixis のみを典型的な指示として、中心的に取り上げる。Diewald(1991 :22f.)もまた、Der-Deixis のみをダイクシスに関わるものとして取り上げるが、Hic-Deixis は非常に軽視し、Der-Deixis と同様の価値があるとする Bühler の見解を批判する。しかし、ダイクシスにおいて話者への関与が不可欠なものであるならば、Hic-Deixis の現象は不可欠な要素であってしかるべきである。なぜなら Hic-Deixis を否定する Diewald(1991)自身、自ら提唱するダイクシス過程の必須要素として、話者への関与を Origo への reflexiver Bezug「再帰的関与」という形で取り入れているからである。このように現在のダイクシス理論には、Origo への関与は重視しつつ、Hic-Deixis は軽視されるという矛盾した傾向が見られる。以上の点について、文献や現地の専門家の意見を聞きながら、本応募者の構想がダイクシス理論においてどのように位置づけられるかを検討する。

3. 研究の方法

(1) 具体的な用例分析については、Origo と視点との関係を調査するという観点から、引用文献には登場人物を中心に筋が展開するタイプの物語を選出する。用例の統計的調査については Origo と視点に基づく分類を主眼とする。場面の中心となる Origo(主として登場人物であることが多い)は移動することもあれば、静止していることもあり、また視点は Origo におかれることもあり、Origo を観察することもある。つまり Origo が移動するか否か、Origo に視点が有るか否かにより、her-と hin-の用例は次の4つのタイプに分類される。このタイプ別の用例数の算出により、her-と hin-及び her と hin が有する視点と Origo の各傾向が明らかになる。

[想定上のダイクシスの4タイプ]

[タイプ a] Origo は移動、視点有り : Origo は移動し、そこから場面を見る

[タイプ b] Origo は移動、視点無し : Origo は移動し、外側から見られる

[タイプ c] Origo は静止、視点有り : Origo は静止し、そこから場面を見る

[タイプ d] Origo は静止、視点無し : Origo は静止し、外側から見られる

具体例の分析は、タイプ別の統計調査のみにとどまらず、各タイプに見られる描写の力点や表現される動作や状況の特徴にも着目し、本研究が目的とするダイクシス理論をより具体的かつ明確なものとする。また空間的用法にとどまらず、非空間的用法にも範囲を広げ、空間以外の次元(時間、人称など)に属するダイクシス表現にも適用できるようにする。

(2) 理論面では、従来のダイクシス理論のうち、Bühler(1934/82)とDiewald(1991)を出発点に、Origoと視点の観点から再検討する。本研究の主眼であるher-とhin-の空間的用法に見られるOrigoと視点の関係は、Bühler(1934/1982)が提唱するインドゲルマン語の位置指示様式の主要な対立、即ち、指差すしぐさに基づくDer-Deixis「それ-指示」と話し手が自らの位置を知らせるHic-Deixis「ここ-指示」に酷似している。このDer-DeixisとHic-Deixisが他のダイクシス理論ではどのように扱われ、取り入れられているかを検討する。また現在調べたところでは、従来のダイクシス理論においては、指差すしぐさに基づくDer-Deixisのみに注目し、Hic-Deixisは看過される傾向があるように思われる。しかしHic-DeixisはBühler(1934/1982)の想定上のダイクシスにおける三つの主要事例やDiewald(1991)のダイクシス過程における再帰的関与にという形で潜在的に論じられており、決して看過することはできない。この点に関してさらに文献を調査・究明し、視点とOrigoのメカニズムがダイクシスに不可欠なメカニズムであることを証明する根拠とする。

4. 研究成果

(1) her-とhin-の分析結果に見られる一人称物語と三人称物語の相違について

Hamburger(1977)は、その物語理論において、一人称が作中人物として現れる物語(下線部を以後「一人称物語」と呼ぶ)と、作中人物が三人称のみに限定される物語(下線部を以後「三人称物語」と呼ぶ)を区別する。

本来herが「話し手への方向」、hinが「話し手から離れる方向」を表すのであれば、her-とhin-は中心的な作中人物が三人称のみである三人称物語ではあまり用いられず、中心的な作中人物が一人称である一人称物語の方が多用されるように思われる。しかし実際に一人称物語と三人称物語についてher-とhin-の用例を収集・分析した結果、一人称物語には三人称物語には見られない制限が加わることが明らかになった。三人称物語の場合、様々な三人称の作中人物が場面の中心となる際にher-とhin-が用いられるのに対して、むしろ一人称の作中人物がその中心的な位置づけを委譲した他の登場人物や別次元の自分のような存在に結び付けられる傾向がある。例えば一人称物語『荒野のおおかみ Der Steppenwolf』の「序文」において、一人称として登場する編集者が場面の中心Origoとなるはずであるが、描写の対象は常に同じ場面に登場するHarryであり、むしろ三人称の登場人物Harryの方がOrigoとしての役割を果たす。また一人称物語『緑のハインリヒ der grüne Heinrich』については、一人称の主人公が見る夢の世界に現れる自分に関連付けられる文脈で、her-とhin-が最もよく用いられている。

(2) ダイクシスから見た物語構造(雑誌論文)

Hamburger(1977:56)は、その物語理論において、「一人称物語」を「一人称が語る文学 die ich-erzählende Dichtung」、「三人称物語」を「三人称が語る文学 die er-erzählende Dichtung」とし、作中人物が語る機能を担うものとする。だがダイクシスの観点から言えば、ジュネット(1985)が指摘するように、語られる作中人物と語る主体は明らかに区別され、語る主体の人称はその語る内容に対して一人称でしかない。このHamburger(1977)による「三人称が語る」という見解のダイクシス上の矛盾は、第一に、三人称物語がフィクションの典型と見なされる点、そして第二に、指示場の中心であるOrigoと指示場を把握する観点である「視点」が未分化であるという点に由来する。以上のことから、本研究では、まずOrigoと視点を区別し、「語り手」と「聴き手」を導入した物語構造モデルを構築し、このモデルに基づいて、なぜフィクションにおいて三人称が専ら中心人物となりうるのか、即ちフィクションにおける三人称の典型性を成り立たせている要因を考察した。

考察の結果、過去形に二つの機能、即ち時間的な隔たりを示す機能と、現実世界と物語世界(フィクション)との間の隔たりを示す機能があり、フィクションにおける三人称の典型性は、前者が背景化され、後者が前景化されることにより生じるという結論に至った。

一人称物語が純粋なフィクションと見なされないのは、語り手が描写対象とする一人称の作中人物は、時空を隔てた自分自身である。つまりこの場合、過去形が物語世界中において語り手と作中人物としての一人称との間の時間的な隔たりを示す機能を中心的に果たすことになる。この過去形による語り手と物語状況間の時間的な隔たりは、当然のことながら、今まさに目の前で繰り広げられるという「現前化」、つまりリアリティや臨場感の妨げになる。

それに対して、作中人物が三人称である場合、一人称である語り手との間には既に人称の隔たりが存在する。すると語り手と物語状況との間の時間的隔たりとしての過去形の機能は背景化され、現実世界と物語世界(フィクション)を隔てるのにもとして効果的に機能することができる。その結果、物語状況における時間的隔たりはなくなり、物語内容は目の前で繰り広げられるリアルな出来事と見なされる。この現前化のメカニズムがフィクションにおける三人称の典型性の要因として提示される。

(3) 言語オルガノン・モデルによる人称の二重構造(雑誌論文)

日本語のコソアの用法は、しばしば話し手や聞き手の関係において説明され、また親族名称は、場面によっては話し手や聞き手を指すのに用いられる。そこで本研究では、コソアや親族名称といった本来三人称に属するはずの表現がなぜ話し手や聞き手を指しうるのかという観点から、指示モードと人称のメカニズムを、Bühler(1934/1982)が提唱する言語オルガノン・モデ

ルに位置づけることにより、人称の二重構造を明らかにした。

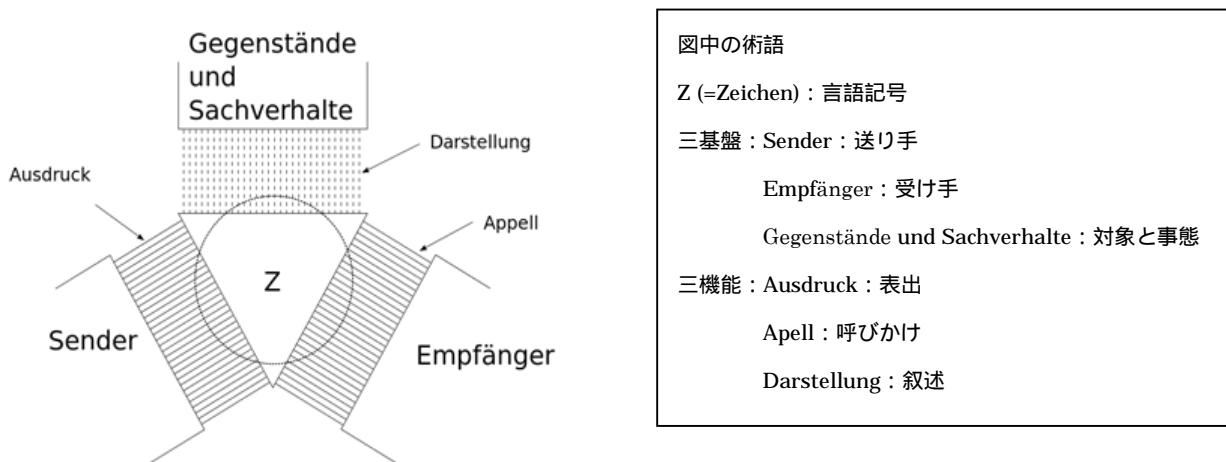


図1 言語オルガノン・モデル das Organonmodell der Sprache
(Bühler 1934/1982:28)(Wikipedia「Organon-Modell」による)

第一の人称構造は言語記号を外から見ることによる人称区分で、「送り手(Sender) = 一人称、受け手(Empfänger) = 二人称、対象と事態(Gegenstände und Sachverhalte) = 三人称」とするものである。林(1979:71)とTanaka(2011:35)はこの立場をとる。第二の人称構造は、二人称代名詞であれ二人称代名詞であれ、言語表現内容の人称は、まず「対象と事態」で構築されるとするもので、Bühler(1934/1982)はこの立場を取る。三人称に属するはずの表現が話し手や聞き手を指しうるのは、第二の人称構造に由来する。本研究では、この二重構造を裏付ける学説として、時枝(1941/2007)の「主体の客体化」、指示場の「非現場性」とピアジェ(1972)の「脱中心化」を紹介し、さらに指示場の中心である Origo「原点」の二重性を提示した。

(4) コソアの意味記述上の矛盾と人称の二重構造との関係(雑誌論文)

古田(1980/1992)は、佐久間(1983)がコソアドの指示詞を話し手と聞き手の関係で位置づけるまでの経緯として、江戸期から明治までのコソアの諸研究を扱う。これらのコソアの意味記述には、人称に関して二つのパターンが見られる。それは、コソアの意味を一律三人称とするパターンと、コソアにそれぞれ一人称、二人称、三人称を割り当てるパターンである。本論文では、そのうち三つの意味記述の相違を示すとともに、その相違の原因を、Bühler(1934/1982)の言語オルガノン・モデルに照合することにより考察する。その結果、コソアの意味記述に現れる「一人称」と「二人称」には送り手と受け手が含まれず、言語記号によって叙述される内容に相当する「対象と事態」、即ち「三人称 GH」に属することが明らかになった。さらに、いわゆる一人称代名詞と二人称代名詞によって表現される「一人称」と「二人称」もまた、言語オルガノン・モデルから見れば、「三人称 GH」に属することも指摘した。

(5) 二つの Origo の言語オルガノン・モデルへの位置づけと「送り手」からの「視点」(学会発表)

Bühler(1934/1982:102f.)によると、Origo という名称は指示場 Zeigfeld を座標に見立てた「原点」に由来するが、この Origo には次の二律背反の特徴が認められる。

まず言語によって指示する際には、Origo の代わりに三つの指示詞 hier「ここ」、jetzt「今」、ich「私」が用いられる。これら hier, jetzt, ich という指示詞は、受け手に対して、いわゆる送り手の位置やその発話の瞬間、そして送り手本人を指し示すことができる。これを Origo の特徴 とする。

それに対して、送り手は自分にとっての前後左右ではなく、向かい合って体操をしている人々から見た前後左右を指し示すことがある。この場合定位の基準である Origo は、送り手以外の他者に移しかえられている。これを Origo の特徴 とする。

このように Origo には、送り手と密接に結合し(特徴)つつも、他者へ移し換えられる(特徴)という互いに矛盾する性質が共存する。この Origo の二律背反する特徴は、どのように成立するのだろうか。

まず特徴 について指示詞 hier, jetzt, ich の実例を検証すると、hier が厳密に発話時の送り手の存在する地点を指し示し、jetzt がまさしく発話するその瞬間を捉え、そして ich がリアルタイムに発話している送り手を表すという事例は、不可能とは言わないまでも非常にまれである。Herbermann(1988)は、hier, jetzt, ich という言語表現が発話時点の話し手に密着するコンテキストではむしろ不要であることを指摘する。Klein(1978)もまた、一見 jetzt と hier が発話時点及びその時点の送り手の位置を示しているように見えるが、厳密に言えば疑わ

しい例を挙げている。そして Bühler (1934/1982) 自身もまた、発言の瞬間を超えた存在を指す ich の例を挙げている。

Origo の特徴 「移しかえ」に関しては、二つの Origo が共起する事例が具体的に挙げられる。Fricke(2003)は、ドイツ語母語話者の大学一年生 33 名を三つのグループ A, B, C に分け、ある道順を説明させるという実験を行う。まずグループ A のメンバーが各自実際に歩いた道程をグループ B のメンバーに伝え、その B のメンバーは説明された道順をグループ C のメンバーに伝える。その道案内の説明で links von dir 「あなたから見て向かって左側に」と言う際に、送り手は、言語上は dir を起点に方向付けを行いつつ、しぐさとしては自分を中心にして左方向を指し示す。つまりこの発話行動においては、du を基準とする言語上の Origo と送り手を基準とするしぐさの Origo が共存する。

この事例により、Origo に関して次の二つの点が明らかになる。

第一の点は、二種類の Origo が共存しうるということである。一方はジェスチャーの中心としての Origo で、もう一方は dir のように言葉によって表現される Origo である。

第二に、しぐさの Origo は送り手に直結するが、言葉による Origo は送り手には直結しない。これは Origo を代用するはずの指示詞 hier, jetzt, ich の表す内容が送り手に直結しないことにも当てはまる。これはつまり、言語化されないしぐさの Origo、いわば「言語外の Origo」は送り手に直結しうることが、言語化される Origo、いわば「言語内の Origo」は、むしろ送り手から離脱する傾向があるとことを示唆している。

この二つの Origo は、Bühler (1934/1982) が提示する言語オルガノン・モデルによって次のようにさらに明示的に図示される。

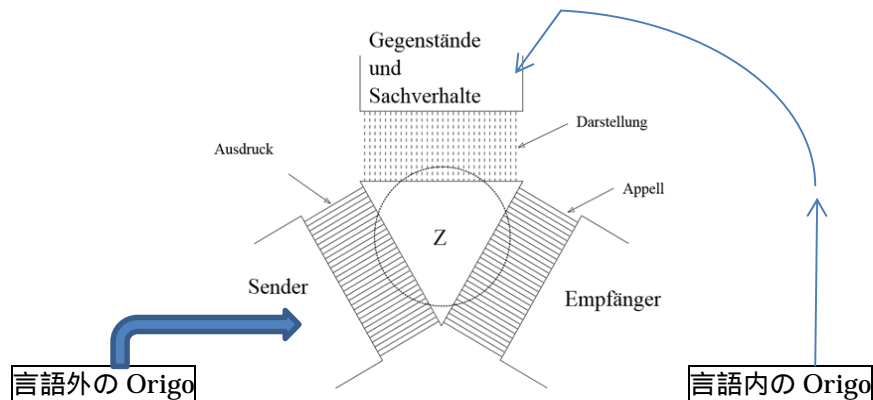


図2 言語のオルガノン・モデルにおける二つの Origo の位置

まず言語化されない「言語外の Origo」は、しぐさなどにより送り手に直結する。それに対して指示詞 hier, jetzt, ich などのように言語化される「言語内の Origo」は、言語オルガノン・モデルに当てはめると、言語記号であるがゆえに、その叙述内容は対象と事態 Gegenstände und Sachverhalte にしかなりえない。つまり言葉の表現内容は、もとより送り手に直結しえないのである。これらの指示詞が表す内容が、なかなか送り手そのものに結び付かないのは、むしろ当然の理ということになる。送り手 Sender は、あくまで hier, jetzt, ich を表出するのであって、叙述される対象とはなりえないのである。

このように言語化されない Origo は送り手に帰属し、言語化される Origo は対象と事態に帰属する。帰属する領域が異なるからこそ、二つの Origo は共存することができる。そして、Origo の特徴は、いわば送り手に帰属する言語化されない「言語外の Origo」の特徴であり、特徴の移し替えられる Origoこそ言語化される「言語内の Origo」なのである。

なお Diewald(1991:19)は、「言語による指示 sprachliches Zeigen」をダイクシスのもっとも簡略的な定義とする。この定義によると、「言語内の Origo」こそがダイクシスで論じられるべき対象となり、本家本元であるはずの「送り手」に帰属する「言語外の Origo」は二次的なものとして位置づけられる。このようにダイクシス理論において、Origo の本質は送り手に帰属するものではなく、「言語外の Origo」は二次的なものと見なされる。この本末転倒ともいえる見解は、随所にみられる言語現象によって正当化される。

(6) 視点と二つの Origo を Langacker (1985) の主観性理論に応用 (学会発表, 雑誌論文)

この論文は、Langacker(1985)の「視角構図 viewing arrangement」の問題点とメカニズムの詳細を Bühler(1934/1982)の Origo 「原点」と「言語オルガノン・モデル」により解明し、視角構図の修正を試みるものである。offstage 及び on stage で知られる視角構図の問題点は、その構成要素の一つである ground に「表現主体」としての話し手と「表現対象」としての話し手が混在することにある。同様の問題は Bühler(1934/1982)の Origo にも見られるが、言語オルガノン・モデルに当てはめれば、前者は記号を表出する Sender 「送り手」であり、後者は

叙述の対象となる Gegenstände und Sachverhalte 「対象と事態」に相当する。この論文では前者を「言語外の Origo」、後者を「言語内の Origo」と呼び、言語表現として表現されるのは後者のみであることを指摘する。さらに Fricke(2003)の道案内の事例において「言語外の Origo」たる話し手のしぐさがまさに視点の体現であるとする。以上のことから、Langacker の視角構図は、「言語外の Origo」から「言語内の Origo」へ一つの視点を派遣するという形に修正される。このような修正により、さらに offstage の「主観性」と on stage の「客観性」のメカニズムが提示されるとともに、これまで完全に分離する形で捉えられてきた両者の連続性のメカニズムも解明される。

(7) 文芸作品における Origo の解釈の検討 (雑誌論文)

Alewyn(1957/1974)によると、Eichendorff の風景描写には、her と hin に前置詞的な方向を表す構成要素が後続する合成語が頻繁に用いられ、her の合成語の方が hin の合成語よりも多用され、これらの合成語が風景描写に用いられる際、話者の関与に相当する Hier 「ここ」が導入される。しかし Alewyn(1957/1974)では、風景描写への Hier の導入が網羅的に検討されているとはいえず、また風景描写に関する語彙ごとの用例数や作品全体における割合についての統計的な調査にも欠けている。そこで本論文では Eichendorff の短編小説 Das Schloss Dürande 『デュランデ城』を対象に、her- と hin- の合成語の使用頻度と Hier の導入について検討する。その結果、数値の上では her- の用例数よりも hin- の用例数の方が多いことが判明するが、これが Alewyn(1957/1974) の主張の反証となるか否かについての議論は、続編に持ち越されている。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 7 件)

— 瀧田恵巳、『デュランデ城』における風景描写のダイクシス(その1)、言語文化共同研究プロジェクト2017・時空と認知の言語学、査読無し、2018、21-30

DOI:10.18910/69945

— 瀧田恵巳、二つの Origo と視点、言語文化研究、査読有り、44 号、2018、69-88

DOI:10.18910/68014

— 瀧田恵巳、コソアの意味記述と人称「一人称」と「二人称」は「三人称」か?、言語文化共同研究プロジェクト2016 時空と認知の言語学、査読無し、2017、21-30

DOI:10.18910/62073

— 瀧田恵巳、人称と言語オルガノン・モデル、言語文化研究、査読有り、第43号、2017、97-118

DOI:10.18910/61278

— 瀧田恵巳、ダイクシス対象の知覚像と非現場的要素の介入、言語文化共同研究プロジェクト2015・時空と認知の言語学、査読無し、2016、21-30

DOI:10.18910/57330

— 瀧田恵巳、ダイクシスから見た物語構造、言語文化研究、査読有り、40号、2014、83-104

DOI:10.18910/27609

〔学会発表〕(計 3 件)

— 瀧田恵巳、二つの Origo と視点、日本独文学会秋季研究発表、2017 年

— 瀧田恵巳、Origo と言語オルガノン・モデル、日本独文学会西日本支部第 68 回総会・研究発表会、2016 年

— 瀧田恵巳、ダイクシス表現による現前化とフィクションの人称、日本独文学会春季研究発表会、2014 年

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者 なし

(2)研究協力者 なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。